

岩木山麓湯ノ沢遺跡の竪穴住居址

村 越 潔

1

弘前市の西北 15km に、青森県一の標高をほこる岩木山（1625 m）がある。この山麓はゆるやかなスロープをえがき、戦前は弘前師団の演習地、戦後は近郷の採草地として利用されてきた。近年この山麓5607ヘクタールにわたる地域は、国の産業特別地域として指定をうけ、いよいよ本年度下半期から機械による開墾がはじめられることになった。

弘前市教育委員会は文化財関係諸団体の請願もあって、該地域に遺る埋蔵文化財を開墾以前に緊急調査を実施することとし、市教育委員会内に特別委員会を設け、その委員会が発掘調査を実施し、弘前大学が調査の記録および出土遺物の整理を行うことになり、すでに昭和33年9月上旬より3ケ年計画ではじめられている。現在まで2ケ年を経過し、確認された44ヶ所の遺跡中11ヶ所を発掘調査した。残る33ヶ所は本年度内に実施する予定で準備にとりかかっている。

この報告は以上の目的で行った、湯ノ沢遺跡発見の竪穴住居址に関するものである。

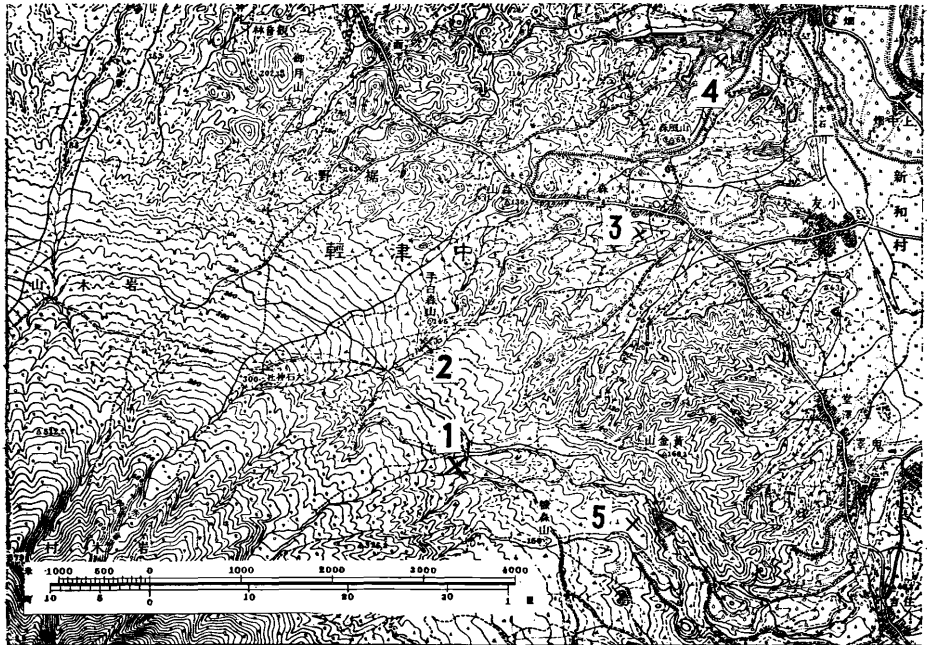
調査は青森県文化財専門委員成田末五郎氏と筆者の2名が担当となり、それに弘前考古学研究会の戸沢武氏、成城大学講師今井富士雄氏の御協力を得、東京大学東洋文化研究所嘱託渡辺兼庸、柴田高校教諭（現金木高校相内分校）佐藤仁、および本学学生（現留萌高校教諭）三村清君等の補助を得た。以上の諸氏と、調査に便宜を計って下さった地主の木村義男氏や、湯ノ沢開拓地の方々に対し深く感謝する次第である。

2

岩木山の中腹には多くの深まった沢が見られ、それらが麓へ下ると小河川になる。この種の川はU字形の断面をなしつつ麓部を流れている。これらの川に挟まれた一帯は起伏が多く、各処に舌状あるいは扇状の地形がみられる。遺跡は以上のような川に接する舌状または扇状台地の突端、ないしは台地上の平坦部に所在している。

湯ノ沢遺跡は岩木山の北東麓海拔 150m にあり、奈良寛の溜池にそくぐ小川（湯ノ沢）に面した扇状台地に存在する（第1図）。地籍は青森県中津軽郡岩木村大字百沢字東岩木山 426 番で、通称湯ノ沢開拓地といわれるところにある。

昭和20年5月近郷の二・三男が入植し開拓をはじめたが、当初は草地と雑灌木の生茂した土地であり、初期には20戸を数えたが脱落者多く、現在は9戸を残すのみである。電気



第1図 岩木山北東麓遺跡分布図

1. 湯ノ沢	} 遺跡
2. 大森勝山	
3. ナカノマ	
4. 砂ノ沢	
5. 尾ノ上山	

その他の設備は無く、文明から遠ざかったまったくの僻地である。

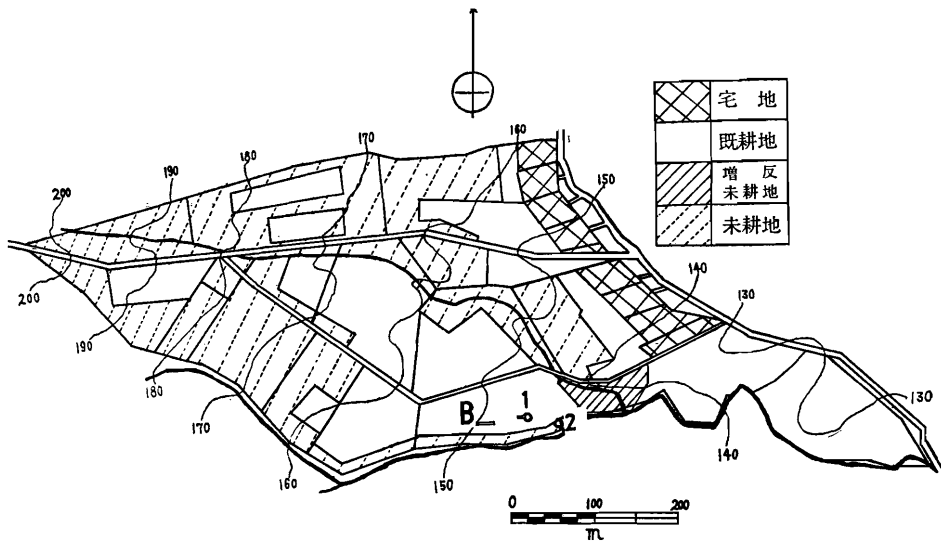
遺跡の地主木村義男氏は開墾中に多くの遺物を発見し、とくに石器を採集していた。これが郷土史研究家の話題となり、すでに幾人かの研究者によって調べられている。⁽¹⁾

3

われわれは昭和33年8月7日、山麓諸遺跡の予備調査中に当地を訪問し、遺跡の現況をみて9月5日から11日まで発掘調査を実施した。

第2図はトレンチの配置図である。1はAトレンチと、そこから発見された第1号住居址、Bは同記号のトレンチ、2は十字形に設定したCトレンチ内発見の第2号住居址である。

第1号住居址を発見したAトレンチの層は第3図右端の如くである。層序は1層12cm内外が耕作された腐植土層で、次の2層は約20cmの暗褐色土層、つづく3層は約15cmの淡黄色を呈する火山灰層があって、ベースは赤褐色粘土質土層となっていた。また住居址内の3層には灰・炭・焼土が20cm程度の厚さで堆積されていた。第1号住居址をのぞくAトレンチ内の遺構は、トレンチ西端から4.10m、深さ約40cmで発見した楕円形の落



第2図 湯ノ沢開拓地実測図（青森県農事試験場作成土壌調査報告書による）
 1. Aトレンチト一号住居址 B. Bトレンチ 2. Cトレンチと2号住居址

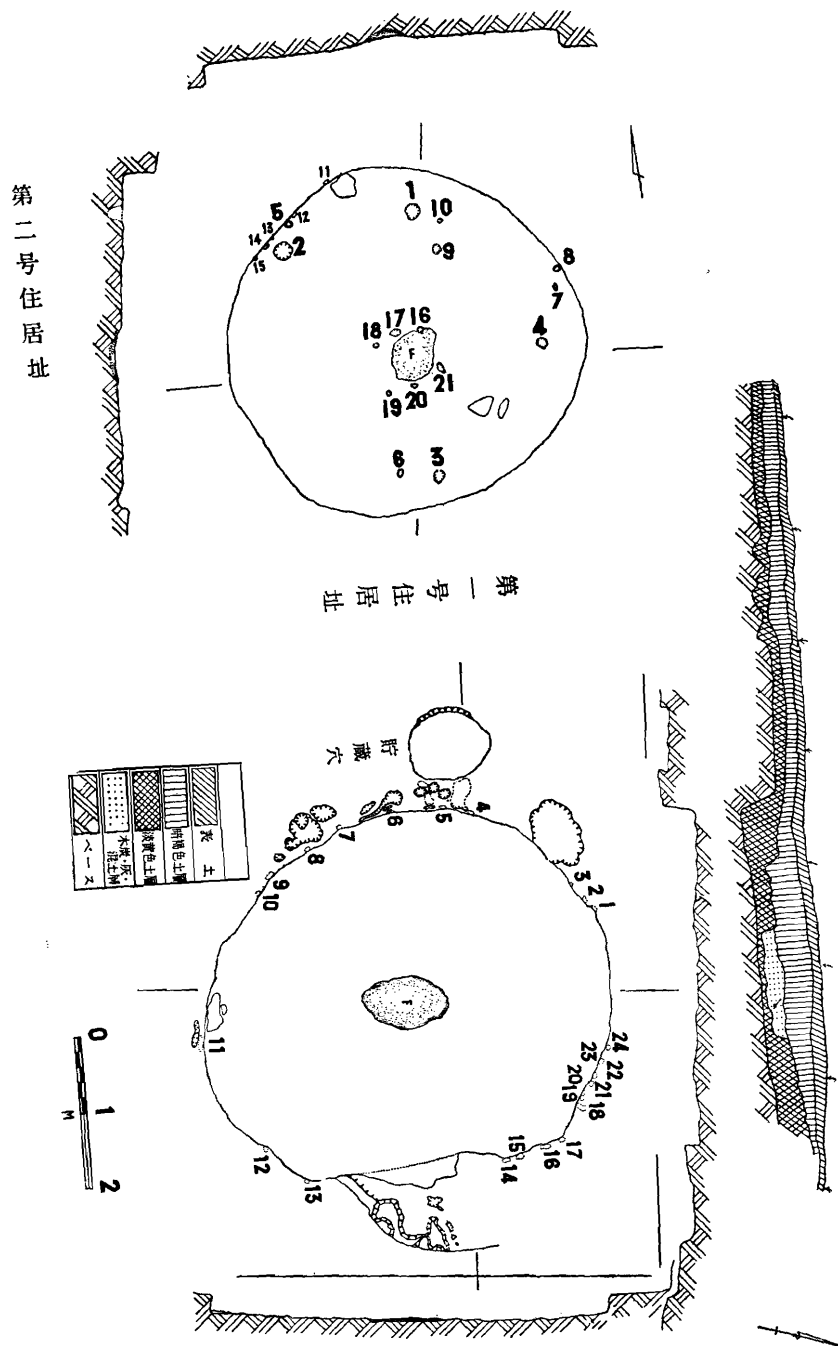
込みのみである。東西95cm，南北1.5mの径を計った。Bトレンチは省略する。CトレンチはAの東南約30mに南北5m，巾1.40m，東西6.50m，巾1.50mで十字形に設定した。Aとほぼ同様の層序をもつ，熊笹の生茂した場所のため拡張は困難であった。したがって第2号住居址を掘りあげたのみで，周囲の遺構を確認することは出来なかった。

第1号住居址（第3図・図版1）

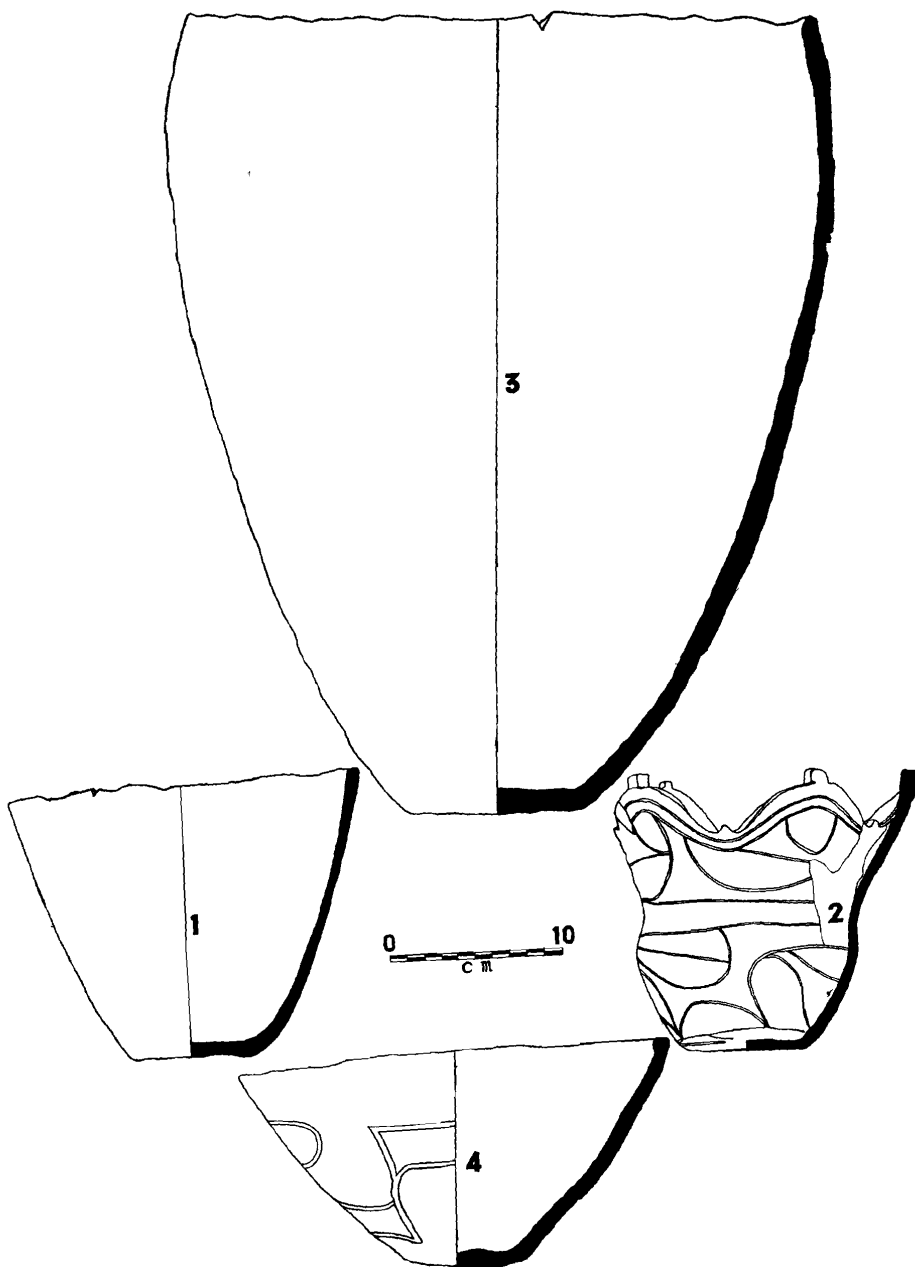
プランは図の如く不整な楕円形をなし，南北の径5.40m，東西5.10mあり，面積は23.3m²（約7坪）である。現地表面からベースまで40～50cm程あるが，このベースをさらに45～50cm掘り下げて，壁面ならびに床面をつくった竪穴住居址である。周壁は調査途時に傾斜をもつと考えられたが，完掘するとほぼ垂直をなすことがわかった。床面は堅く固められていたが，凹凸はげしく，全体からみると中央部にむかって若干傾斜している。炉は床面のほぼ中央につくられ，南北1.10m，東西70cmの径をもち，10cm内外の厚さで土が焼けていた。柱穴は周壁と床面の接点に24発見され深さは平均約7.5cmあり，いずれも40～41度の傾斜をもって周壁内部に掘込まれていた。

これら柱穴の計測表は次の如くである。

柱穴番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
長径	12	8.5	7	10	10	7	7	7	9	6	15	5	9	11	12	14	9	15	6	6	7	10	7	6	
短径	5.5	5	4.5	4	3	4	5	4	6	6	8	5	5	6	11	6	7	9	5	5	7	5	7	6	単位
深さ	5	6	10	10	11	5	3	5	20	7	4	4	5	7	13	19	6	11	4	5	5	5	6	6	(cm)



第3図 第1・第2号住居址実測図



第5図 第1・第2号住居址出土土器実測図

遺物（第4・5・6図）

この住居址から出土した遺物は、石小刀および磨石等の石器が各1、深鉢1、甕形1、五弁鉢1、等3個の土器である。

A. 石器

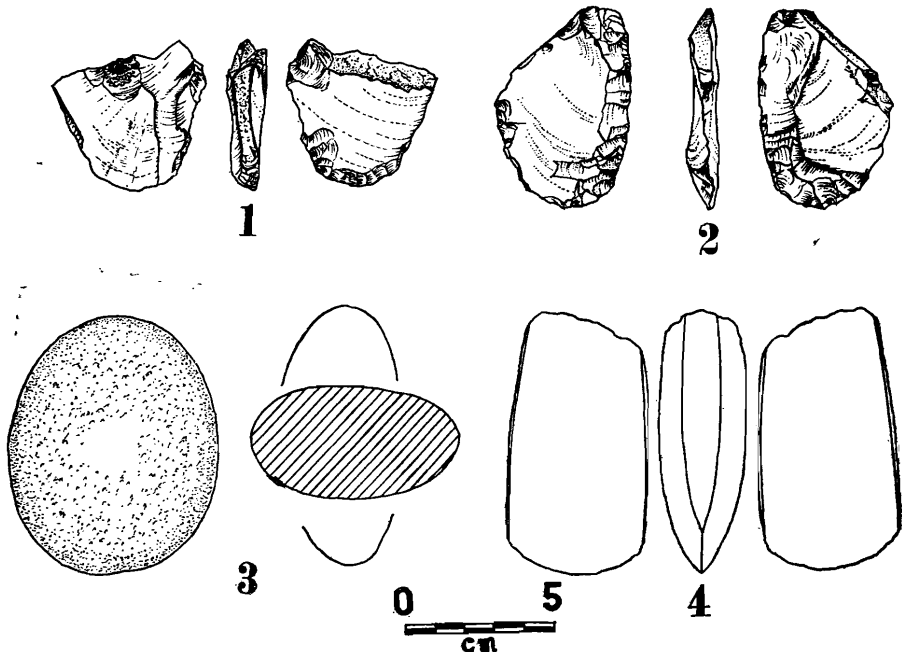
石小刀（図略）、長さ7cm、巾3.3cmある。不整な二等辺三角形をなすもので、珪質頁岩の剝片をそのまま利用している。表面には自然面を、裏面に剝離面が残され、また表面の両側はTrimmingされている。

磨石（第4図3）、長さ8.6cm、巾7cm、厚さ3.9cmある。岩木山麓に多い輝石安山岩を使用している。床面の東南隅にある平坦な石とともに発見された。

B. 土器（第5・6図）

深鉢（第5・6図1）、床面の東部で44片の破片となって出土した。復元の結果、大きさは口径20cm、高さ15.1~16.2cm、底径6.6cmあり、厚さは口辺部7mm、底で9mmを計った。文様は口辺から底部まで羽状縄文が施文され、色は表が赤褐色、裏は褐色ならびに黄褐色をなす。胎土・焼成ともに良好である。口縁の断面をみると、平らな部分と円い部分とがあり、器形全体はやゝ傾いている。底は若干揚げている。

甕形土器（第5・6図3）、畑の北側から口を南に向け、横倒しのまま押しつぶされた状態で出土した。207の破片を接合の結果、口径35cm 高さ45~46.5cm、胴部の最大径38



第4図 第1・第2号住居址出土石器

cm, 底径9.7cmあり, 厚さは口辺部1cm, 胴部1.2cm, 底1.4cmを計った。文様は口縁から底部まで全面にわたって羽状縄文が施文され, 色は中程より上部が黝黒色, 下部が黄褐色をなし, 裏は褐色ならびに黄褐色である。口縁は丸みをおびつゝも, とがった形状をなす。底は平底である。器形は口辺部が内反し, 全体をみるとやや傾いている。胎土には少量の砂粒をふくみ, 焼成は良好である。

五弁鉢(第5・6図2), 床面の東部より20程破片となって出土した。復元してみると口径17cm, 高さ16cm, 底径6.5cmあり, 厚さは弁上の突起が1cm, 口辺7mm, 底は6mmある。五つの外反する波状弁をもち, その上部に1cm内外の方形突起がつけられ, 波状弁のあいだには三角状の突起がみられる。胴部は中央部がくびれており, 底は平底である。口辺の裏側にはふくらみがみられ, 器内全体に煤の如き炭化物が付着している。文様は口辺に2条の沈線をめぐらし, その間は縄文でうずめられ, 胴部は弧線と羽状縄文をたくみに組合せて飾っており, 縄文の施文されない部分は滑沢面をなしている。色は表が赤褐色, 黝黒色, 裏は黝黒色をなし, 胎土には少量の砂粒をふくむが, 焼成は良好である。

第2号住居址(第3図・図版1)

プランは図の如くほぼ円形をなし, 径は東西4.83m, 南北4.65mあり, 面積は17.2m²(約5.2坪)である。周壁は垂直で壁高は35~40cmあるが, 南側が沢の傾斜面に露出していたため削られて, わずか14cmを残すのみであった。床面は堅く固められており, 多少起伏するが第1号住居址(以下1号址と略す)程ではない。炉は床面の中央部より若干東南寄りにつくられ, その径は東西60cm, 南北65cmあり, 焼土の厚さ13cmを計った。柱穴は床面に4つ発見され, また10cm内外の穴が6つあらわれた。さらに1号址と同じく周壁と床面の接点に5つあり, 41度の傾斜をもって周壁内に掘込まれていた。このほか炉址を囲んで6つの小穴が発見された。これら柱穴の計測値をみると次表の如くである。

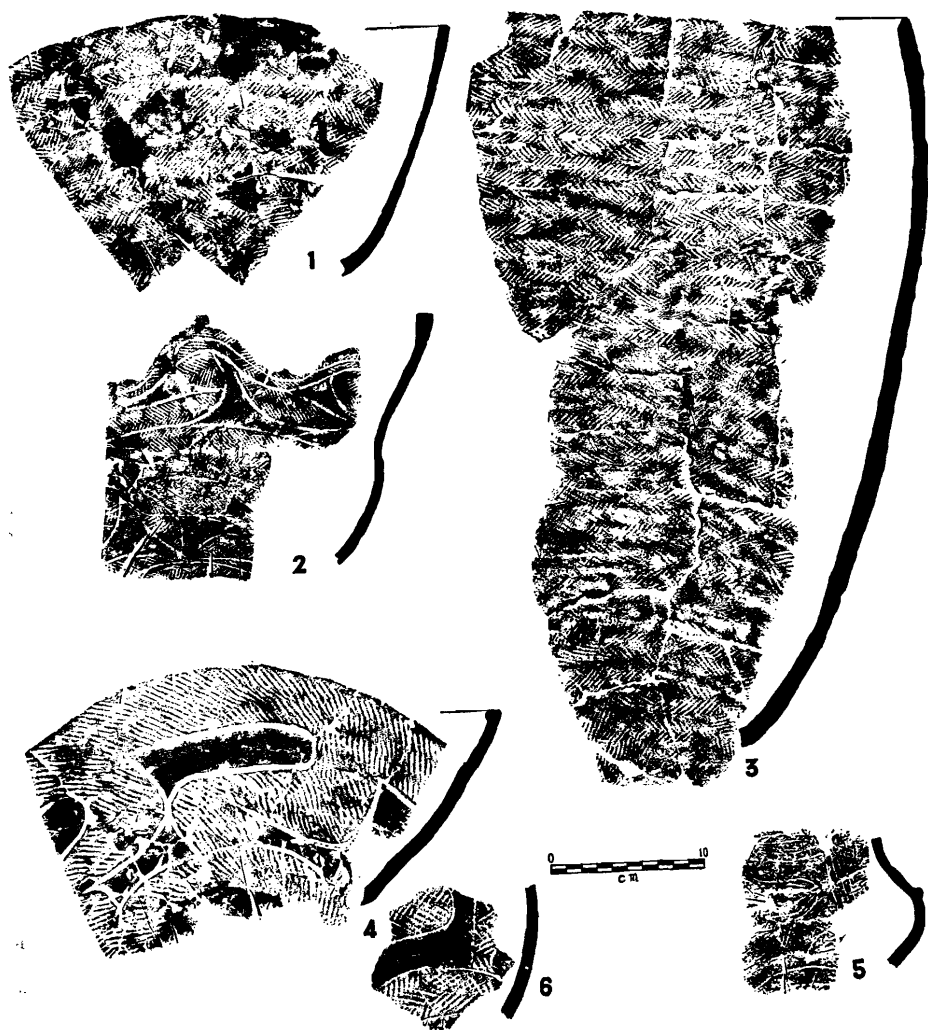
柱穴番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	単位 cm
長 径	23	25	19	15	11	11	10	10	14	6	6	8	6	10	9	9	14	9	7	11	15	
短 径	20	25	15	15	10	10	7	9	13	6	4	3	3	5	4	9	11	7	7	8	9	
深 さ	20	12	18	14	12	10	7	6	20	5	?	〃	〃	〃	〃	3.5	5.5	7.5	5.5	5.5	4.5	

床面の北隅に表面が平坦な石を発見した。石皿としての用途をもつものか, あるいは住居址の出入に用いた踏石とも考えられる。

遺物(第4・5・6図)

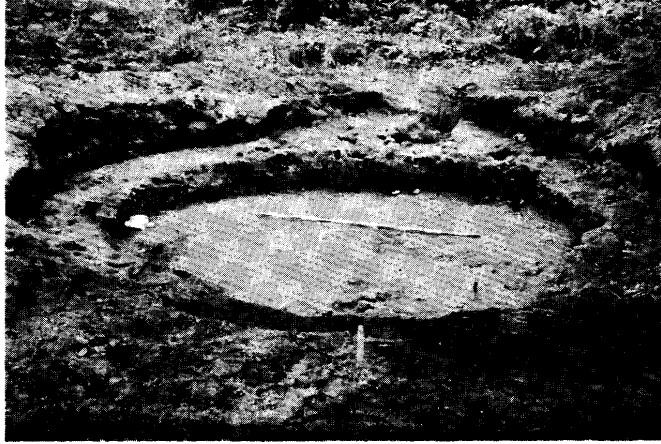
この住居址で出土した遺物は磨製石斧1, 石小刀2等の石器と, 浅鉢1の土器である。

A. 石 器



第6図 出土土器拓影

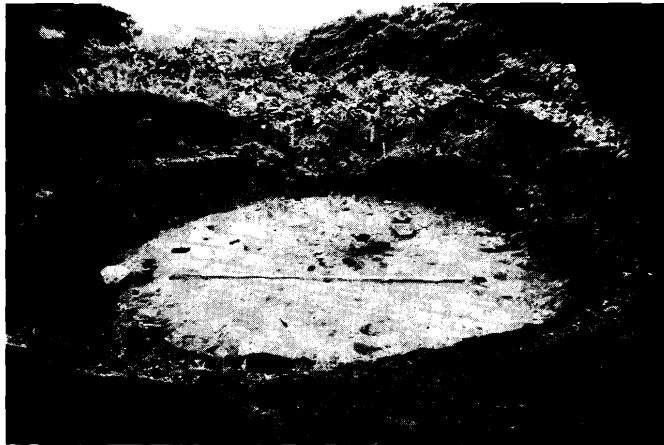
図 版 1



第1号住居址



2号 址床面出土浅鉢



第2号住居址

磨製石斧(第4図4), 変質安山岩をもちいている。長さ8.9cm, 巾4.6cmあるが, 頭部は折れて欠失している。したがって, これを図上復元してみれば, 12cm程の長さをもつ乳棒状石斧であったろう。全面に研磨の痕跡を有するが, とくに側面はそれが顕著である。

石小刀(第4図1・2), 1・2とも珪質頁岩をもちいたもので, ともに上部を欠失している。表面に自然面を, 裏面に剝離面がみられ, 1は裏面にのみ Trimming がなされている。1は長さ4.8cm, 巾4.9cmあり, 2は長さ6.6cm, 巾4.5cmある。

B. 土器(第5・6図)

浅鉢(第5・6図4, 図版1), 床面の東部から41の破片となって出土した(図版1)。接合の結果, 高さ12.5cm, 口径24.8cmの浅鉢となったが2/5程足りない。厚さは口辺9mm, 底1.1cmある。口辺の裏側は, コの字形にはり出して周縁をめくり, 文様は地文に右下りの斜行縄文を, 口縁から底部まで施文し, その間を部分的に曲線あるいは直線の篋描よう沈線文で輪郭をつくり, その内部は滑沢面をなしている。色は縄文の部分が暗褐色を呈し, 滑沢面と裏面は黒褐色である。胎土, 焼成ともに良好である。

4

以上は湯ノ沢遺跡で発掘した2つの住居址と, その床面から出土した遺物の概要である。遺物はきわめて少いが, 若干の土器破片も伴出したのでこれをふくめて出土遺物の時代と住居址に関する考察を試みたいと思う。

1号址から出土した3ケの縄文土器のなかで時代を決定する唯一の手掛りとなるのは五弁鉢である。従来東北地方から発見されたもので, この形に似た資料としては福島県会津坂下町長井出土の宝ヶ峯式土器²⁾がある。しかし施文された文様等は同県相馬郡新地村小川貝塚出土の新地式土器³⁾に近似する。両者とも不幸にして実見の機会を得ないが, 新地式土器はボタン状の瘤が文様の中心となって, 弧線・曲線が展開されているよう⁴⁾である。これと同様な破片は1号址から出土した(第6図5)。この土器片には縄文がみられず平行細条線が描かれている。したがってこのような類似点から1号址の前記せる土器は, 距離的に可成りの距りはあるが縄文後期の新地式に平行になるのではあるまいか。他に粗製の深鉢, 甕形土器等もあるが, 文様の手法はまったく同様であり, 五弁鉢と同時期に比定しても異論はないと思う。2号址で出土した浅鉢と第6図6には, 関東の加曾利B式的な要素がみられる。したがって1号址出土土器が新地式と同時期になるとすれば, 2号址の浅鉢はその直前に位置するとも考えられ, 編年的な変移を試みると次のようになると思われる

奥羽南部 南境→宝ヶ峯→新地→金剛寺

津 軽 鳴沢？ →湯ノ沢2→湯ノ沢1→ ？

関 東 堀之内Ⅱ→加曾利B→曾 谷→安行1

同じ遺跡の立地条件も同様なこの2つの住居址が、時期を異にして存在したものか、あるいはまた奥羽北半の当地方で同時期に、相違をもつこれらの土器がつくられたものか、今後の研究課題としておきたい。

次に住居址の問題であるが、全国的にも縄文後期の竪穴住居址は例が少なく、津軽では湯ノ沢が初めての発見である。この時期の遺跡としては、岩木山麓において前森・小森山等の諸遺跡がある。すでに昨昭和34年発掘調査を実施したが、住居址の輪郭すら把握出来なかった。したがって他に比較すべき類例が無い。以上の点から一方的な見解になるのを恐れるものである。

湯ノ沢の1号址は床面に柱穴が発見されずどのような形の屋根を葺いたかは不明である。しかし周壁と床面の接点に24の小柱穴が掘込まれていたため、屋根の高さは想定出来る。その小柱穴は40～41度の傾斜をもっていた。この角度が当時屋根の勾配であったと仮定すれば、高さは床面から2.80m、周壁上から2.35mとなる。これと同様に、2号址も類似する小柱穴を基に計算すると、床面から2.45m、周壁上から2.10mである。

住居址内の遺構で異なるものは、2号址の炉址周囲に穿たれた小柱穴である。種々憶測されるが、煮炊のさいの土器の支えか、あるいはそれに用いたヤグラの如きものをつくっていたのであろう。床面にあらわれた10の柱穴とともに、1号址とは異った遺構をもつ。

1号址の西側で発見された楕円形の落込みは、1号址に所属する食糧あるいは物品の貯蔵庫または貯蔵穴であろうか。

1号址の排土作業中に第3図のAトレンチ・セクションに見られる如く、灰・炭・焼土の堆積層があった。トレンチの1・2層から縄文晩期の大洞A'式（砂沢式）土器が多量に出土しているため、あるいは1号址の上に、晩期のころ住居を構えた人々の遺した炉址であろうとも思われる。

以上の点より湯ノ沢には竪穴住居址を遺した縄文後期と、大洞A'式を遺した晩期の2回にわたり、人々が居住したことをうかがい知ることが出来る。

5

最後に本稿を草するに当たり、助言をたまわった八幡一郎先生、石器の用材をお調べ下さった本学地学教室の宮城一男講師、付図のトレースに協力いただいた弘前市教育委員会の田村誠一、滝本勉、本学学生大江正文君等に厚くお礼申し上げますとともに、以上の方々の応援に対して充分こたえることが出来なかったことを深くお詫びいたしたい。

- 註 1. 山屋道朗 踏査日記の一頁より 陸奥史談 第21輯 陸奥史談会
2. 世界考古学大系1 日本篇1 図版12 5 平凡社
3. 同 上 図版12 7 〃
4. 同 上 漁撈文化の展開 4土器 P112 平凡社